

Title	篠原三代平著 日本経済の成長と循環
Sub Title	
Author	大熊, 一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.1 (1962. 1) ,p.91(91)- 93(93)
JaLC DOI	10.14991/001.19620101-0092
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620101-0092">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620101-0092</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。つまり彼は、フランス「人民」をみていたので、独自の階級としてのプロレタリアートをみる事ができず、したがって、その国際的連帯性を認めることもできなかったのだと思われる。

さて最後に、ルイ・ブランが、どんなタイプの社会主義者であったか、考えてみよう。第七章「革命家なき革命」においては、くりかえし、ブランや、その他の左派が、いかにそのエネルギーの源を、パリの労働者に求めていたかが強調されている。大革命の時と違って、彼らは、地方がパリについてこないであろうことをよく知り、かつ怖れていた。大革命の力の一つだった隷農は、今や小土地所有者になっていくからである。⑤⑥では、パリの労働者は、どういう階層によって構成されていたのだろうか。この点について著者は本格的な研究をしていないようである。だが、こういうことはいえないだろうか。ブランが頼った労働者、民衆は、近代的な組織労働者ではなかった、と。そういう意味で、彼は古い型の政治指導者の、おそらく最後の一人だったのでないだろうか。大革命の

時と同じように、パリ民衆の人気を唯一つの基盤として、決して組織の上ではなく、名声の上にもたがったリーダーだったと思われる。第十章「幻滅」にもそのことはうかがわれる。彼は下層中産階級も、労働者もひっくるめた「人民」⑦⑧、その政治的モツの上のみに乗っていたのである。第十一章「小さな巨人の没落」は、いかにブランが、自分を社会主義運動の人格化したものと考えていたかをよく浮きぼりにしている。彼は社会主義それ自体であり、彼の成功は社会主義の成功であり、彼の亡命はそのままジャコバン社会主義の、運動としての敗北なのであった。⑨⑩⑪

ルイ・ブランに関しては、長らく新しいモノグラフが途絶えていたと思われるが、当時の新聞をも十分使った、本格的な研究が現われたことはよろこばしい。単なる伝記以上のもの、ということができよう。

### 新刊紹介

ヘンダーソン、クオント共著

小宮隆太郎訳

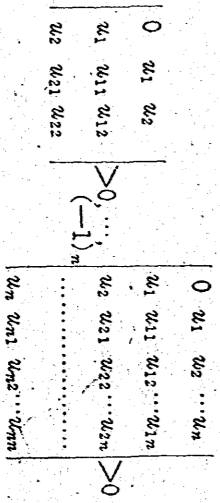
#### 『現代経済学』

——価格分析の理論——

本書は、James M. Henderson and Richard E. Quandt, *Microeconomic Theory: A Mathematical Approach*, McGraw-Hill, 1958. の邦訳である。原著の標題である「微視的経済理論」というのは、よく知られているように消費者や生産者の主体的行動から構成される市場の均衡の理論、一口にいって正統的な価格の理論のことであるが、そのような分析領域は巨視的所得理論が進展した今日においても依然としてきわめて重要なものであり、むしろ後者に對するケインズの功績が歴史のパスベクトイブの中に正しく位置づけられるにつれて、ますますその基礎的根拠性を再認識されつつあるように思われる。その意味で、「価格分析から所得分析へ」という一時わが国でも流行したスローガンほどその後の理論発展のコースを皮相に誤り印象づけ

るものはないのであって、われわれはサムエルソンとともに、所得分析に補強された「新古典的綜合の立場」が今日の支配的共通地盤であることを認めねばならないのである。このことはハーバードやオックスフォードなどのカリキュラムを見るならば、疑う余地のない明確な事実である。

さてこうした観点からして、本書の公刊をしてその邦訳書の方が国における公刊は、価格理論の秀れた中級教科書の資格において右の共通地盤の教課の上に多大の効用を發揮するであろうと考えられる。ここで中級と形容する所以は、一応幾何図形による説明はマスターしたが解析による説明は不可解という読者層に對して、本書はこの上なく懇切で信頼するに足る手引きを与えているからである。一例をあげていこうならば、消費者均衡理論で2財のとき無差別曲線が原点に對して凸という叙述なら分るが、同じことを一般にn財のとき、



と書かれるとどうも分らないというたぐいの読者のために、本書は周到な橋渡しを用意してくれているのである。

そのように、例えばヒックスの『価値と資本』の本文は分るがその重要な数学付録は分らないという人のために、またポールディングの『経済分析』は分るがサムエルソンの『経済分析の基礎』は分らないという人のために、当然あってしかるべきであった踏石を提供してくれること、それが本書のもっている最もユニークな意義であるといつてよい。近著中推薦に値する佳作である。(創文社、A5・四二頁・八〇〇円) 福岡正夫

篠原三代平著

#### 『日本経済の成長と循環』

本書は、著者篠原氏が比較的最近発表された日本経済の実証分析を内容とする諸論文を、書名の示すところにしたがって集録したものである。全体としての一貫性も十分保つよう整理されており、いわば氏のこれまでの研究の仮決算とみる事ができよう。本書の序文で著者は、「あたかも自然科学

で発見とか新しい仮説がしばしば重要視されているのと同様に、経済の実証分析においてフアクト・フラインディングとか新しい仮説の樹立がもっと重視され、これにもっと真剣にとりくまれてよいと、かねがね考えてきた。……このような行き方は、統計数字をモデル

にあてはめてプロジェクトを行ふことに主たる関心をいだく最近の実証分析のタイプからみれば、たしかに異端であろう。あるいは、理論を応用するといったことが中心で、日本経済がたんにその素材として用いられているにすぎないように考えている人とは、研究態度がまさに正反対となっている。この意味で、本書を評価なさる場合には、幾何の重要なフアクト・フラインディングが行われているかということを見逃さぬように、私は希望したい」と述べる。われわれも著者の意とするとともにしたがって、たとえばこの本から、成長と循環の理論的図式を学ぼうとしたり、経済発展の運動法則をひきだそうとしたりして、本書に性急な評価を与えてはならない。氏のユニークな仮説の提示の仕方と説得力ある説明とは、いつも読者の関心を大いにそそるものであるが、むしろそうした仮説の根拠となつているところの、統計数字に

対する著者のふかい読みこそ、学ぶものを見いだすべきであろう。あるいは、理論的構成のコレットにあまりにも締めつけられすぎている論理主義者にとつては、著者のゆたかな洞察力と警敏な着想とが、新鮮な刺激となるべきであろう。

本書は戦前戦後の日本経済の高度成長とよばれるものの要因を解明した第一篇、戦後経済におけるいわば成長率循環の特質を追求した第二篇、高度成長における輸出ドライヴ説を論争を中心として展開した第三篇の三部から成る。それぞれの篇はいちおう独立しているが、著者がいだいて日本経済へのヴィジョン——貿易と二重構造——といったものが、一貫して脈打っているのである。

高度成長を実現した要因はなんであるか。従来成長力論争でもとりあげられた主要な要因はもっぱら必要成長率の要素としての貯蓄率と資本係数とであり、必要成長率を実現にいたらしめること、有効需要成長率の要因はあまりとり上げられていない。これは有効需要がきわめてお、盛であるとの現実認識を前提したからで、同じ資本主義経済の長期理論でも、戦前における長期沈滞論と戦後の経済成長論とでは、総需要と総供給と、力点のお

きどころがまったく位置を変えた観がある。著者はこれに対し、戦前からの高い日本の成長率を、高い輸出成長率という要素に焦点を当てて解明する。高い輸出成長率が国内成長率をひき上げ、国内市場を拡大する効果が非常に大きかった、つまりある意味では古典派的な成長のプロセスが強調される。それなら、高い輸出成長率を可能にしたものはなんであったか。著者はこれに「交易条件の長期的不利化」の仮説をもって応え、さらに後者を説明する要因として、二重構造の分析を企てる。

二重構造の分析は、「資本集中」の仮説によつて代表される。つまり、低賃金を基盤として輸出産業を発展させながら、この輸出の高度成長の結果を、いわゆるビッグ・ブツの形で国内資本の高蓄積に充てたというものである。

著者のこうした「マル経的」発想をそのみとりだしてみるなら、この発想が本書で十分論理的に展開されているとはいいがたい。しかし、この発想を支えるいくつかのフアクト・フラインディングに関するかぎりは、まさに著者自ら発見し開拓したものである。われわれは本書において、たとえば国際間工業生

産指数の作成とか、在庫投資の推計とか、融資・在庫循環の二重性とかいう、統計的吟味にこそ、ふかく学ぶことが必要なのである。(創文社・三六年六月刊・A5・三九八頁・九〇〇円) \* \* \* 一 大熊 一郎

宮本又次著 『フランス経済史学史』

経済史の研究は世界的に重要な地位を占めるようになった。フランスでも研究体制を整え、予期以上の成果を挙げつつある。誰によつて、どんな研究が出されたか。そこにはフランスなりの方法があるわけだが、特徴は何か。本書はこうした問題に答えることを直接の動機としている。経済史をどう進めていくか。そのための有益な指針が本書から得られるに違いない。

しかし著者がこういった形で著書をまとめた動機はそれだけにとどまらない。かなり積極的なものがあった。序にみる如く、それは外国経済史研究の方法そのものに関連した。わが国において外国の事象の史的的研究に従う場合、史料の直接参看は不可能である。外国の

学者が示した研究を判読し、それを手がかりに理解しなおすほかない。著者はこれこそが外国経済史研究の効果的な方法という。そうした視点に立てば、外国諸学者の発書はわれわれにとり生の素材であり、素材に対する深い理解を得るためにもそれがフランス学界でどれほどの位置を占めるかといったことへの反省が外国経済史研究で第一の階梯となる。いわば史料批判にでもあたろうか。本書で著者はそれを果した。経済史の研究が精緻化するなかで史学史的考察の必要はますます高まつていく。本書の刊行は時宜を得たものといえよう。

著者は昭和廿九年から一年間滞仏した。本書の第二部はその間の見聞を基礎に、大阪大学経済学部の機関誌『経済学』に連載されたものの集成である。これによつて最近の動向を知ることができよう。本書の第一部はかつて著者が『歴史と経済社会』(昭和廿三年刊)の一部として発表したもの転載で、若干補筆されており、黎明期から戦前にかけての事情を扱う。著者の指摘によるまでもなく、フランスで経済史は長く片隅に捨てられて来た。ルヴァッスール、シミアン、オーゼ、セー、ブロックが現われ、注目すべき業績を残して

いる。しかし散発的な努力に終り、研究の一つの方向を打出すまでにいたらなかった。経済史がその地位を獲得したのは第二次大戦以降といつていい。起源はかなり古い。しかし成長の過程で後れをとってしまった。これは経済史研究に対決するフランス人の精神にかかわる問題であろうが、本書では立入った言及がない。もっとも知りたかった点だけに残念であった。(ミネルヴア書房・昭和三六年十月刊・A5・本文三六四頁ほかに索引・一〇〇円) \* \* \* 一 渡辺 國廣

越村信三郎著 『マルクス主義計量経済学』

経済学に数学を使用すること、それは数量をあつかう科学、すくなくとも量的側面をもつ科学である経済学にとつて当然のことであるように思われる。量的な関係を通常の言葉でのべることには限界がある。ごく簡単なことだからから一歩前進しようとするとき、数学は必須の用具となる。数学は量的な科学にとつて、日常の言葉なのである。マルクス経済学においても、多くの偏見が